

五月の子どもたち——その1

春の子どもと土のベッド

新井 隆俊

幼稚園の庭から小高い丘がすぐそばに見える。丘の北斜面の尾根はかつて多摩川の蛇行によって削られたのか三角形をしている。その形にちなんで子どもたちと名づけた三角山の稜線が、雑木林の新緑で隠れるようになる。時にウグイスの鳴き声が聞こえて来ることもある。

庭で遊んでいる子どもたちを誘ってしばらく聞き耳をたてる。五月になると幼稚園にある巣箱にシジュウカラが毎年のように住んでくれるので、ひなに餌を運ぶ様子や巣立ちの賑わいの様子を子どもたちと一緒に見守ることが出来る。シジュウカラは警戒もせず子どもの遊び声中を自由に巣箱まで飛んで来る。

春になって花が咲き始めると、子どもたちに対して土

ばかりの花壇しか用意出来なかった冬の間の気持ちから解放させられる。子どものために環境を整えることにかけては格別な、自然という名の先生が何人もやって来てくれたような気持ちである。考えてみれば、ものごと順番があること、共存して暮らすこと、分からないことがあることなど、どれも自然が人に教えたことばかりである。興味をもって見る子どもに、違いを考えさせたり、記憶に残るような場面をいくらでも用意して子どもに働きかけてくれる。春はたいへん心強い味方である。眠っていたと思うものを揺り起こすことも、揺り起こされることもつらいことである。そんな意識を持つ大人という例外をのぞいて、植物も、昆虫もそして子どもも

春の生命力を素直に受け入れているようである。

登園の途中、道端かまだ耕作の始まらない田んぼで子どもが草をつんで来る。雑草の花であるから、とがめる人もいない。植物の種の増やし方、運ばせ方には想像を絶するような巧妙さがあるので、雑草の方にも考えがあつて、幼い手のひらで種を運んでもらおうとしているのかも知れない。幼稚園に着くころには、子どもの片手にいっぱい握られた草花は半ばしおれかかっている。時には私にその草花がプレゼントされる朝がある。多少の時間をかけて得た自分の所得物全部をくれる行為もありがたいが、その花束を友好のしるしとして受け取る時は嬉しいものである。

子どもたちにとって草花の名前はおそらくずっと後からくるものである。名を知らずにある草花があることを知っている。そういう時期はとても大切であると思う。子どもの世界には有名無実というものが入り込めないものだと思ふことがある。春には新しく仲間に加わった子どもたちの名前をまず覚えることに力を注ぐが、子ども

の名前を覚えると、その子どもを多少理解したような気持ちになるようなことに対しては自分で用心しなければならぬと思う。

五月になると子どもたちはプランコをより自由に使うことができるようになる。プランコに乗れない子どもは少ないが、順番を待ったり交代したり、安全な使い方を身につけるまでは多少の制約がある。そのプランコのまわりにコの字の形にプランターが置いてある。プランコの安全柵のかわりである。鉄の棒でできたプランコの柵をよく見かけるが、幼稚園の子どもにとっては鉄棒という遊具になってしまいそうであるし、平均台のようにその上をあるく子どももあるかもしれない。そんな心配も手伝って大きめのプラスチックのプランターに花を植えプランコのまわりにぐるりと置くことにした。

子どもは自分で植えた花を大事にしてくれる。土の重さもちょうどよく、ボールがプランコの空間に転がり込まないように止めてくれる。プランターは一年おきぐらゐに買い替えるが、子どもにも注意力をそれとなく呼びお

こしてくれるなかなかいい花壇である。パンジーをたくさん買って子どもと先生と一緒に植え込む仕事は毎年のことになった。砂場のシャベルは運動場を掘らずに砂場で使うように入園した子どもたちに勧められているが、このときばかりは土を掘れるので参加者が多い。

保育室のテラスと運動場の間には六十センチぐらいの高さの花壇がある。いろいろな役目を果たしている花壇だが、子どもの目に花を近づけたいと考えて作ったものである。花の匂いもすぐ嗅ぐことができるし、子どもの顔のすぐ前に紋白蝶や花蜂がやって来るのでとてもありがたい。花壇を高くしてから、草花に関する子どもたちの質問が増えたようである。

幼稚園には門から少し離れた所に小さい畑がある。子どもたちがお芋をひと株ずつ育てて、さらに花壇のために数種類の花の苗を育てることのできるぐらいの広さの畑だが、畑というより空き地か雑草園と思われる時期の多い場所である。近所の小学生がよくボール遊びをし



て、作物を植えた直後に運動靴の跡を様々な向きに残してくる。普段から畑らしくないので「今は畑だからね。」とことわることは気が重いものである。

田んぼでもないのに、子どもたちと弓矢を持ったかかしを立てたりしたが、風ですぐ倒れてしまうので、今では板に「ようちえんのはたけ」と書いた立て札を立てた。この板も雨と風でみすばらしくなる日もそう遠くはない。そしてまた楽しいかかしを子どもたちと作ろうと思う。「立て札」もいろいろな話に登場するので教材であるが、「かかし」の方がずっといい。子どもたちが大きくなって、かかしこそが世界をよく知っているものだと思いを秘めることがあるかも知れない。

職員室の書類棚には「若葉菜園」という背表紙のファイルを作って年間計画を設け、作物の記録がたまって行くようにした。五月にかぼちゃを作ろうと言う計画が持ち上がった年があった。地面の上で作物が出来ていく様子を子どもたちに見せたいと思ったからである。ずっと重いかぼちゃを収穫することを思い描き、それに

かぼちゃのお味噌汁は子どもの味覚に合いそうだと意見がまとまった。さて、かぼちゃはどうやって作るのだろうか。「だれか知ってる?」と言っても返事をするものはない。いつも石灰をたのんでいる農協に電話をして、事情を聞いてもらった。親切な対応でたいへん恐縮をした。数日後にかぼちゃの作付け講習会が保育室で開かれることになった。子どもたちが帰った後、指導員の方から思ったよりも長い説明を伺った。なるほどとうなずくことばかりであった。

それからの畑の準備はひと仕事であった。子どもたちとかぼちゃを植えてから職員はいつもより朝早く出勤することになった。朝八時までにかぼちゃの雄花と雌花を交配させるためである。花に隠れるようにして小さなかぼちゃが見つかる。子どもたちとそれを目を細めてさわった。テニスボールぐらいになると交替で手のひらにのせてみた。次第に畑のあちこちでかぼちゃがめだつようになり、両手でそっと持ち上げてみたり、ペタペタとたたいて大きさを比べたり、それは楽しい観察のひとつ

となった。太陽に当たってどこもいい色になるように、ゴロゴロとかぼちゃの向きを変えるようになった頃、お礼の電話をした。私たちは言われた通りにしただけなのだが、いかにも自分たちが上手に作ったような少々得意な気分を味わった。

子どもたちと引きぬく楽しさを味わおうと思って大根を作った年もあった。たくさんの収穫に子どもも先生もお喜びで、お母さんに分けて上げられる喜びを味わった年もあった。お弁当の時にかぶの味噌汁が加わった年もあった。作物の記録は専用の場所を持っているが、なかなか上手にはたまらない。楽しい思い出の記録がたまるばかりである。

このところ小さな畑では、春から秋にかけて子どもたちとさつま芋を作り、そのあと小松菜の種を子どもたちと蒔いている。宅地化が進んで数えるほどになってしまった近所の畑で、いつもりっぱな野菜を作っている顔見知りのおばあさんが、春になると作物を籠に背負って

届けてくれる。そんな時いつも「小松菜に花を咲かしちゃあだめよ」と注意をうける。畑に精を出してない証拠という意味である。そんなこといったっておばあさん、先生ってほかにすることがいっぱいあるんですよ、なんて言ってもだめである。畑を遊ばせておくなんて「しょうがないねえ」と笑われてしまう。

摘み残した小松菜が子どもの背丈ほど伸びて黄色い花を咲かせ、子どもたちと先生がその花を摘んでクラスに飾り、やがて種が子どもたちの指のすきまに詰まる頃、そろそろ芋畑の準備にかかる。仕事の都合で時間が思うように取れない時など、春の遠足から帰って来たその日に、子どもたちが苗を植えるばかりにするために最後の畑仕事をすることもある。そんな時ばかりはせまい畑でも笑い顔をすることはできない。

芋の苗は車で十五分ぐらいの農家で毎回わけてもらう。種屋さんに紹介してもらった農家で、苗の用意が出来たと連絡をもらおうと車で取りに行く。取りに行くのはいつも私の役目である。農家の庭先に着くといつもご主

人はなにかしら用をしていて、すぐには苗をいただけない。その間じゃまにならないように庭先にある苗床や作物を見せてもらう。知らないことをひと言ふた言で教えてもらえることもある。芋を植える間隔によって収穫に違いがあることや、しおれてから植えるとよく根がつくことなど、わずかな時間で伝授してもらったことは多い。芋の苗はしおれてくると、こりゃたいへんだと頑張って根を出すそうである。

五月もおわり頃に雲の様子を気にかけて、畑の土の湿り具合をみて、ひとクラスずつ順番に子どもたちとお芋を植える。一人一本ずつ苗を手にして子どもたちは畑を囲むように集まり、苗を手にしたクラスの先生から植え方を聞く。「このお芋は縦にはうえないのよ。いい、横にねかせてうえるの。」「先生これお芋じゃないよ。」「お芋はね、これから土の中でできるのよ。このへんに。おうちでおふとんをかけて眠るでしょう。土をこうして横にほって、ねかせて、土のおふとんをかけてね。」「クラスの先生の身振り手振りとう足りない言葉でどれだけ要領が



伝わったか、説明が長いと子どもは飽きてしまう。

さっそく一列おきに畑に入り、石灰であらかじめマークをしておいたうねの上を子どもたちは掘りはじめる。苗が右を向いたり左を向いたり、とても等間隔にはならない。子どもたちがひと仕事終えて帰った後で、植え残した場所があるようだと思ってみると、苗がすっかり布団にもぐっていたりする。根付いてもらわないと困るので、どの列も点検をしなければ植え直してまわる。浴槽のように作られた土のくぼみに苗がそのまま横たわっていたりするところもある。となりの子どもが植え終わって席をたって行ってしまふときに、土をかき忘れて一緒に行ってしまったのだらう。夏がけのような布団に丁寧に押さえつけた手のひらの跡が残っているところもある。コレクションにしたくなるような子どもたちの思い思いの土のベッドである。様々な植え方をさせても根付くこのさつま芋の生命力は強いものだと感心する。私たちのやせた畑でもある程度の収穫をすることができるとこの作物は、ずいぶん人々を救ってきたこと

だらう。

さつま芋の苗に水をあげ、数日後に葉がピンとたつてくると、これも子どもたちにとって一つの話題である。草取りに畑にかけ、蔓がのびる様子を観察したり、こぼれ落ちた小松菜の種があちこちでいきいきと育っているのを見つける。耕作しない畑の片すみには自然に帰りたいいちごランナーを自由にはわせ、何年も自生している。草むらの中で子どもと一緒にいちごつみをするときい調理用のボール二つが一杯になる。これからはのびた蔓をひっくりかえしたり、蜂の巣に驚かされたり、十月の収穫の季節になれば、ねずみかなにか、おなかをさせた小動物にかじられたお芋を見つけたり、子どもとの話題と小さな生き物たちの探索に楽しいひと時を過ごすことができそうである。

しばらくは自分の植えたお芋の場所を覚えていて丹精している子どももあるが、やがて夏休みになって畑から遠のき、また畑一面に茂った蔓を見れば、どれが自分のお芋なのか忘れてくれるだらう。秋にみんなで収穫する

時には同じ大きさのお芋を手にするとはできない。どの子どもも、大きさや形を比べ、自家製の天秤量りで重さ比べをすれば、みんなで同じぐらいつつ分配することに同意してくれるだろう。幼稚園で子どもたちとお芋を味わうこともあるが、家庭の食卓にまで楽しさが届く日を楽しみに思う。

大人が花のある生活環境を楽しみに準備することは、昔から子どもたちにとって一つの精神的な風土になっているような気がする。子どもたちはいま土のベッドから起き上がるうとしているのかも知れないし、眠っている

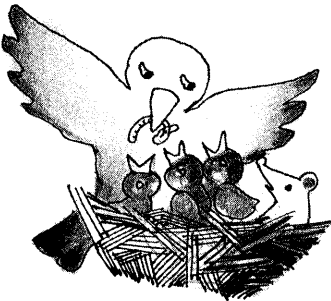
のかも知れない。やがて花に限らず植物との付き合いを続けて行くと植物のライフサイクルに気がつき、再生の季節が訪れた時にどの生き物も同じものではないことに気づく日がある。そんな時には小さい頃の植物との思い出が知らず知らず自分自身を掘り起こしていることだろうと思う。将来掘り起こすべき時代を子どもは今いきている。子どもが手続きを知らずに花をちぎることがあっても、叱ったり嘆いたりしない余裕をもって幼稚園の植物を丹精して行きたいと思う。

(川崎若葉幼稚園)

五月の子どもたち——その2

その時に

中谷喜久子



ことしのぼたんはよいぼたん

おみみをからげてすつとんとん